

三吉政道, 降旗兼行, 津島健司
笹林万里, 堀田順一, 漆畑一寿
高師修治, 塚平晃弘, 山崎善隆
佐藤悦郎, 山口伸二, 小泉知展
藤本圭作, 大久保喜雄, 久保恵嗣

症例1: 59歳男性, 左側胸部痛, 両側胸水を主訴に当院入院. 右側の胸水細胞診にて肺腺癌と診断. 左側胸部痛, 低酸素血症が持続するため, 肺血流シンチ, 胸部CTが行われ, 肺血栓塞栓症(PTE)と診断した. 抗凝固療法, フィルター留置にてもPTEを繰り返し, 約一カ月の経過で死亡した. 症例2: 53歳女性, 乾性咳嗽を主訴に当院受診, 画像上右側に大量の胸水をみとめ, 細胞診にて肺腺癌と診断され入院. 胸腔ドレーンによる持続排液中, ショック状態となり, 両下肢に血栓を認め, 心臓超音波などにてPTEと診断した. 血栓溶解療法, 抗凝固療法, フィルター留置にて改善したが, 全身状態悪く, 肺癌に対する治療は行えなかった.

16. 肺門部腫瘤影で発見されたブラ関連肺癌の2例

国立三重中央病院呼吸器外科

畑中克元, 金田正徳, 坂井 隆
同 呼吸器科 井端英憲, 大本恭裕

症例1: 44歳, 男性. 持続する咳嗽にて当科を受診, 胸部CT上, 右上肺野に小結節を伴ったブラと, 右主肺動脈, SVCを圧排する腫瘤を認めた. 小開胸, 肺生検を施行, 術中迅速で腺癌と診断され, 右肺摘除術を施行. 症例2: 30歳, 男性. 嗄声にて耳鼻科を受診, 左反回神経麻痺, 左肺門部腫瘤を指摘され, 当科へ紹介. 胸部CTで左上葉に索状影を伴うブラと弓部大動脈下方に腫瘤を認めた. 開胸, 肺生検で扁平上皮癌と診断され, 左上葉切除術を施行した.

17. 頭頂部皮膚転移を伴った肺扁平上皮癌の1例

富士市立中央病院内科

小野寺玲利, 井上 寧
木下 陽, 児島 章
同 病理部 徳田忠昭

症例は77歳, 男性. 平成12年8月頃より頭頂部皮膚腫瘤に気付き, その後胸部異常影を指摘された. 精査にて肺扁平上皮癌と診断, 皮膚腫瘤もその

細胞形態および浸潤形式などから肺癌皮膚転移と診断した. 皮膚転移巣に対し放射線療法を施行するも, その後全身状態悪化にて永眠された. 文献上肺癌皮膚転移は3~4%程度と比較的まれであるが, 皮膚転移を有する症例はMST3カ月程度との報告があり, その有無に注意が必要である.

18. 脳転移切除後に原発巣に集学的治療を行った肺癌の2例

国立療養所岐阜病院呼吸器内科

今尾要浩, 長瀬清亮, 小牧千人
佐野公泰, 加藤達雄
同 外科

倉橋康典, 岡本俊宏, 宮本信宏
大久保憲一, 五十部潤, 上野陽一郎
伊東政敏

症例1, 31歳男性. 平成9年12月, 近医にて孤立性脳腫瘍を指摘され切除術施行, 転移性腫瘍と診断(腺癌). 当院転院後, 原発巣の右Sleeve上葉切除術施行(p-T₁N₀). 続いて全脳照射, 胸部放射線療法, 化学療法を施行. 症例2, 58歳男性. 平成11年10月, 近医にて脳腫瘍(2病巣)を指摘され切除術施行, 転移性腫瘍と診断(腺癌). 当院転院後, 全脳照射, 化学療法施行, c-T₁N₀で左上葉切除術を施行.

19. 転移性脳腫瘍に対する定位的放射線治療の検討

国立名古屋病院放射線科 加藤恵利子
同 呼吸器科

平岩真希子, 川井美保子, 佐光智絵子
熊澤昭文, 沖 昌英, 坂 英雄

平成12年より定位放射線照射を開始し, このうち, 肺癌脳転移9症例14部位の定位放射線照射結果を報告した. 9症例中PS不良は4例, 8例が脳外不制禦病変を有し, また4例が脳転移治療後局所再発例であった. SRSは3人6部位, SRTは6人8部位に行い, その選択は主に腫瘍容積によった. 定位治療後生存期間は1.7~9カ月(中央値4.7カ月), 2症例が治療後2カ月以内に原病死し, 適応選択が課題であった.

20. ポリープ状腫瘤による閉塞性肺炎にて発見された腎細胞癌肺転移の1例

三重県立総合医療センター内科(呼吸

器)

久瀬 望, 藤本 源
吉田正道, 筒井清行
三重大学第三内科 田口 修

症例は53歳, 男性. 平成12年5月下旬より乾性咳嗽と発熱あり. 肺炎として治療を受け軽快するも, 右肺野浸潤影が残存するため, 紹介となった. 気管支鏡にて右B2及びB6に白色調のポリープ状腫瘤を認め, 生検組織標本は淡明な細胞質からなる上皮群を含んでいた. 腎細胞癌を推測してCTを実施したところ, 右腎下極に造影剤で染まる腫瘤を証明した. 腎細胞癌として泌尿器科に転科, インターフェロンを含む治療を開始し, 経過観察中である.

21. 虫垂転移をきたした肺小細胞癌の2例

藤枝市立総合病院呼吸器内科

三輪清一, 塚本克紀
森田純仁, 田村亨治
浜松医科大学第二内科

千田金吾, 中村浩淑

肺小細胞癌の虫垂転移はまれであり今回2例を経験したため報告する. 症例1は72歳男性. 平成11年5月LDの診断でPEとTRTが施行されCR. 翌年1月肺局所再発と脳転移にてTRTとGKが施行. 6月腹痛が出現し虫垂炎の診断で手術. 症例2は66歳男性. 平成12年4月LDの診断でPEとTRTが施行されPR. 10月脳転移にてGKが施行. 11月腹痛が出現し虫垂炎の診断で手術. 2例とも病理診断は虫垂転移であった.

22. 切除肺より診断し得た末梢性同時性多発肺癌の1例

国立療養所中部病院呼吸器外科

近藤一男, 平松義規, 横見直敬
症例は69歳, 男性. 1999年1月に肺炎にて近医入院中の喀痰検査で腺癌陽性であった. しかし病変を指摘できず, 経過観察中の2000年7月の胸部CTで右肺底区に結節影を指摘された. TBLBにて腺扁平上皮癌と診断され, 当院にて右下葉切除術を施行した. 切除標本ではCT上指摘できた腫瘍とは別に同じ肺底区にあるbulla周囲に腫瘍が存在した. 組織型はそれぞれ異なり, 喀痰陽性所見は術前指摘できな